

## 佐々倉先生をしたらう

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 正辰 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026139">https://doi.org/10.14945/00026139</a>

学会」設立を発起されました。

ここに、1964年6月28日、本県に於て初めて、小・中・高・大学を通じ、一貫した、しかも巾の広い学会が誕生し、設立日なお浅いのかかわらず、現在着実な発展を遂げつつあります。

この大業を成し上げられた先生の御卓見、御手腕は、如何に高く評価しても、過ぐることはないと同時に、その間の御苦心・御苦勞は、筆舌に尽し難いものがあったことと思います。

「静岡県地学会」発足1年有半、会誌も第5号編集の最中、私達同志同行会員200有余は、突然、かけがえのない指導者であり、慈父のような会長先生を、病魔のために、奪われてしまいました。悲これに過ぐるものはありません。

御遺族の御悲嘆もさぞかしと、深くおくやみ申し上げます。

先生も、未だ未だ、多くの御研究を計画されておられたことすし、後に残された御遺族に思いをいたされては、さぞ、御無念、御心残りのことと御察しいたします。

私達会員達は、先生の御遺業の、永遠の不滅を信じ、先生の巨大な御足跡に従って、先生の御遺志を体し、結束して、斯学の拡充、発展に微力をいたす覚悟であります。先生、どうぞ御見守り下さい。万感胸に迫り、申し上げる言葉もありません。

今は唯、先生の安らかな御昇天と御冥福を御祈りして、お別れ申し上げます。

(本会副会長)

---

---

## 佐々倉先生をしたう

竹内正辰

静岡大学が新制大学として発足した最初から佐々倉先生と私とは教育学部地学教室に席を並べて勤めてきた。他界された望月勝海先生ともいろいろ相談して、地学教室の発展を計ってきた。望月先生が逝かれ、このたび佐々倉先生がまたゆかれ、しかも不治の同病の犠牲になられたことは、不思議の関係というほかはない。望月先生と佐々倉先生とは格別に深いおつきあいであったが、両先生とも私のような凡人とはちがって独特の風格者であっただけに、達観的な望月先生と周到を尊ばれる佐々倉先生との会話は、私にはひとしをひかれるものがあった。望月先生なきあとの佐々倉先生は、思い出を語られながら非常におさびしそうであった。今日となってはありし日の先生の面影を思いうかべ、先生をおしたいするほかにみちがない。研究室でじっくりと熟慮されながらペンを動かしておられた御容姿、少しうつむきかげんに静かに何か考えながら歩いて居られた御姿など、教室の一同の頭からも少しもはなれていない。

先生の御研究は休むことなくつづき、ことに数年前から、かつてのデーターを整理して貴重な論文を学会誌にだされた。その整理をことのほか楽しんでしておられた。その御姿もありありと思い出される。それが晩年の整理のようになったことは皮肉である。しかも未整理のものも少なくないらしい。これらの完遂を期待して居られたことを思いあわせると、御気の毒にたえない。学問的研究のほかに随筆を楽しまれたことは皆よく知っている。その随筆集を発刊する御計画も拝聴しているし、船の模型の写真集の出版計画もうかがっていた。先生御自身の手でこれらが完遂されなかったのは残念であらう。写真に熱中されて雲も大分撮影された。近郊を散策されてスケッチを描かれたこともあったし、スケッチの描き方の本をわざわざ見せて下さったこともあった。先生程多趣味の方は少ないように思われたし、何をされても人一倍夢中になって楽しんで居られた。そこに先生の先生らしさがあった。座談も人一倍御すきだった。書物を多読されるだけあって話題は豊富だった。時には我々をはじめ学生を相手に面白い話をされた。その御話にはいつも先生の独特の人生観がひそんでいた。

先生をおおくりした後の教室は、望月先生なきあとをついで第二回目の変革期におそわれた。この変革は両先生の風格の然らしめる結果として、我々には大きいショックである。余りにも第一回目の変革につづいてはやくおこりすぎた。我々のうけるショック以上に、奥様はじめ御家族一同には更にさらに御悲嘆の極みであることを忘れることができない。我々地学教室は先生によってその基礎がかためられ、将来への軌道はひかれた。その御遺業をうけて幸い我々はそれにそって安全に運転をつづけてゆけばよい。先生の御苦勞に甘んじて我々はたどるべき将来のみちをはっきりふみしめるであろう。先生の御高德に浴した我々は、必ずや御厚恩にむくゆる努力をするであろう。これが先生と御家族に対して我々のなし得る最善のみちでなくてはならない。

(静岡大教育学部)

---

## 佐々倉先生を偲ぶ

山 崎 誠

41年1月7日佐々倉先生の突然の御逝去は気象の勉強を志す私たちにとって、学問の指導者と同じ時に心の支えを失った暗い日であった。もう小刻みにこつこつと音高く歩まれた先生にお会い出来ないとは今でも信じがたいのは私だけだろうか。

私にとって先生は慈父であり、頑固親父でもあった。静岡大学にはいり補導教官として御指導をお願いし、4年生になり卒業論文の御指導をいただいたので時々先生のお宅に伺った。先生は大きな平机の前に和服姿で端座され